

若き大陸 アフリカの可能性

20日から横浜市で「TICAD9」

日本政府が主導し、アフリカの首脳級らと開発や支援について議論する第9回アフリカ開発会議（TICAD9）が、20日から22日にかけて横浜市で開催される。経済的に急成長しながらも、さまざまな課題を抱えるアフリカ。今後、日本はどのように関わっていくべきか、JICA（国際協力機構）緒方貞子平和開発研究所の峯陽一所長に聞いた。

峯陽一 JICA緒方貞子平和開発研究所長に聞く



みね・よついち 1961年、熊本県生まれ。2023年4月から現職。人間の安全保障学会会長。立命館大学客員教授。専門は人間の安全保障、開発経済学、アフリカ地域研究。著書に『開発協力のオール・ヒストリー』など、共訳書にマイケル・ローゼン『尊厳』など多数。

平均年齢19歳、豊富な資源

世界経済の巨大市場に浮上

地域の特徴

世界におけるアフリカの位置付けは。

峯陽一所長 あえて一つ挙げるなら、圧倒的な「若さ」だ。アフリカ全体の人口のうち19歳以下が半分以上を占めている。21世紀を通じて、人口が増え続ける唯一の地域であり、2050年には世界人口の4分の1、そして2100年には4割近くになる。

それが意味するのは、旺盛な消費意欲を持つ巨大市場の浮上だ。さらに規制が厳しくないことからイノベーション（技術革新）の源泉にもなるだろう。人だけでなく天然資源の供給源でもあり、世界経済にとって死活的に重要な地域になる。

——アフリカが抱える課題は。

峯 紛争や貧困、新興感染症の問題が語られがちだ

が、気候変動について指摘しておきたい。これは食料安全保障とも深くつながっている。

アフリカでは雨頼みの天水農業が主流で、西アフリカのサヘル地域（サハラ砂漠周辺の乾燥地帯）などは、気候変動の影響で慢性的な干ばつに陥っている。しかし、温室効果ガスを排出し

てきたのは先進国だ。アフリカは責任がないにもかかわらず、その最も深刻な被害を受けている構図だ。

また、国によっては政情不安につながりやすい状況もある。ソーシャルメディアの普及によって、独裁的な高齢指導者に対する若者たちの不満が蓄積しているのが気になる。

国数	54カ国
面積	約3000万km ² 米国の約3倍 日本の約80倍
人口	2024年：約15億人 2050年：約25億人 世界人口の1/4に
平均年齢	19歳 日本は48歳
1人あたりGDP	2024年：1940ドル ラオスと同程度
スマートフォン普及率	51% 2030年には88%に達する見込み (北アフリカを除くサブサハラ地域)
主な資源	石油、ダイヤモンド、金、レアメタルなど
貧困	世界の貧困人口の2/3が集中
難民	世界の国内避難民の3/4が集中
日系企業の拠点数	2024年：948拠点 在留邦人数は約6500人

※日本貿易振興機構、JICA、外務省などの資料を基に作成

アフリカの主な特徴

AIやDXなど

先端技術生かした課題解決へ

TICADとは、アフリカの開発をテーマとする国際会議。1991年の国連総会で日本が提唱し、93年に東京で初開催した。以来、日本政府が主導し、国連や国連開発計画、世界銀行、アフリカ連合委員会と共同で開催している。

今回のTICAD9の期間中

テーマは「革新的な課題解決策の共創」。AI（人工知能）やDX（デジタルトランスフォーメーション）を含む日本の先端技術を生かした、日本とアフリカ双方の繁栄につながる課題解決策を議論し、さらなる官民の連携強化をめざす。

は、国際機関や企業、大学などによる200以上のセミナー・シンポジウム、300近くのブース・パネル展示が行われる。岩屋毅外務相は「日本とアフリカ双方の官と民、そして民間企業同士が、ななる多様な機会を提供したい」（8日の大臣会見）と述べている。

文化面では、アフリカでは、日本のアニメや漫画が大変親しまれている。日本でもアフリカの文学や音楽、美術などにもっと関心が高まることを期待したい。特にアパ

日本は

対等な立場貫き、大きな信頼 民間企業の「動かないリスク」懸念

第1回のTICADを開催し、アフリカとの付き合いを本格化させたのは、欧米がアフリカへの援助協力に疲れ、引き揚げの機運が高まっている中だった。

日本は上から目線の一方的な援助ではなく、アフリカの人々と一緒に問題解決を考えていく姿勢を鮮明にした。よく言われる「魚を与えるのではなく、釣り方を教える」というものだ。TICADの回数を重ねても、この日本側の姿勢は今日まで揺らいでいない。

アフリカは、過去の列強による植民地支配の経緯もあり、大国と永続的な同盟関係を結んで特定のプロットに入ることを避ける。アフリカの側が、どこに付き合うかの選択権を持っている。そうした中で、日本が独自の信頼関係を築いていることは貴重な財産だ。

最初のTICADから30年余り経過した今、奇遇に

も、当時と同じように欧米が再び内向きになつてい

る。米国はトランプ政権になり、USAID（国際開発局）を解体した。欧州はウクライナ戦争を受け、国際協力よりも自国の防衛力増強を優先させている。そうした中で日本が踏みとどまり、今回もTICADを開催する意義は非常に大きい。

——日本の取り組みの課題は。

アジアとの触媒役果たせ

公明「人間の安全保障」実質化を

必要な視点

——今後、必要な視点は。

峯 日本はTICAD9の中で、インドから中東諸国、アフリカ大陸に向けた一帯を新たな経済圏と位置付ける構想を提唱するよう

だ。自由で公正な経済圏を

めざす外交方針「自由で開かれたインド太平洋」をさらに西に広げ、日本がアジアとアフリカの触媒の役割を担っていくことは非常に価値がある。日本の国際的地位を高め、サプライチェーン（供給網）を安定化させ、民間企業のリスク低減にもつながる。ぜひ進めてもらいたい。

「デジタル人材の育成も重要だ。医療や教育、農業などあらゆる分野でデジタル技術をどう活用するかが問われている。JICAにはアフリカ各国の若い行政官などを日本に呼んで大学院修士号を取ってもらい、母国で活躍してもらう留学制度がある。こうした仕組みを拡充すべきだ。」

——文化面では。

峯 アフリカでは、日本のアニメや漫画が大変親しまれている。日本でもアフリカの文学や音楽、美術などにもっと関心が高まることを期待したい。特にアパ